

さばえ近松文学賞

ゝ恋話 (KOIBANA) 2025ゝ

受賞作品集

2025年

◆受賞作品◆

◆近松賞

「三里山の女幽霊」

原田 なぎさ
(東京都品川区)

◆優秀賞

「恋する龍は虹に舞う」

藤森 弘
(長野県岡谷市)

「めがね屋の女房」

久保田 裕子
(東京都武蔵野市)

◆佳作

「近松門左衛門が転生したら、どうするか？」

露崎 和寿

（静岡県浜松市）

「思い出めがね」

安藤 良章

（神奈川県横浜市）

「七曲り心中」

西村 一江

（山口県山口市）



特別審査員 藤岡陽子（小説家）

講評

「近松賞」

「三里山の女幽霊」

原田なぎさ氏

大学生の主人公が自分の故郷、鯖江市に戻り、昭和6年生まれの曾祖父に再会するところから物語は始まる。

都市伝説の幽霊話が出てきたり、先を知りたくなるストーリー展開がとてもおもしろかった。

テンポよく話が進んでいくうちに、やがて物語は戦時中の福井で起こった一つの悲恋にたどり着く。

今年が戦後100年目であることを読者に気づかせ、キャラクターも立っていて、幼馴染の二人の距離感もとてもうまく書かれていた。

大学生の主人公の成長がしっかり伝わってきたのと、戦争を体験した世代からの大きなメッセージが残る奥行のある作品だった。

物語の力で歴史を伝えていく大切さを改めて感じさせてくれた、近松賞にふさわしい傑作。

「優秀賞」

①「めがね屋の女房」

久保田裕子氏

「no side」という眼鏡屋を鯖江で営む夫婦の元に、妻の元カレがやってくる
ところから物語は始まる。

夫と妻の2視点で描かれているので、夫婦の心のすれ違いがよくわかる。

妻は3年前に夫と結婚しているが、5年前に別れた元カレへの気持ちもまだ胸

の内に残っていて…。

妻と元カレはどうなるのか、とラストまでハラハラ。切ない心情に審査員一同心つかまれた。

②「恋する龍は虹に舞う」

藤森弘氏

世界観が独特で、味わいのある美しい文章が随所に見られた。西山公園、近松門左衛門、眼鏡ミュージアムなどの使い方が巧く、物語から鯖江という町が立ち上がってきた。どのように物語が展開していくのか、わくわく感があった。

「太陽が雲間から顔をのぞかせ、雨粒のひとつひとつが七色の光を宿している」など、文章力が際立っていた。

「佳作」

①「思い出めがね」

安藤良章氏

40代の独身女性が実母の突然死に直面し、寂寥感の中で自身の生き方を考えるという物語。

ストーリーだけ追うと暗い感じなのだが、主人公が自立していて、明るく潔い。初恋の先輩と偶然出会うという展開も自然で、ラストには明るいものを残してくれた。

②「七曲り心中」

西村一江氏

近松門左衛門が主人公の時代小説。近松が「次郎吉」と呼ばれていた少年時代が描かれている。作家の虚構なのだろうが、事実かと思わせる巧さがあった。

近松の胸の内には消えない赤い炎があり、その炎が彼に「心中もの」を書かせたのだと納得させられた。

③「近松門左衛門が転生したら、どうするか？」

露崎和寿氏

高校生が主人公の瑞々しいストーリー。登場人物の高校生たちの会話がおもしろかった。

近松門左衛門は「心中」を題材に物語をよく書いた。だが彼が現代に転生したらなにを書くだろう、と主人公たちが思いを巡らせるという発想が新鮮だった。高校生の不器用な恋の描きかたもよかった。



審査員長 水間 貴子

総評

復活したさばえ近松文学賞に、前年度より百点以上も多くの応募があったこと、大変嬉しく思っております。挑戦してくださった皆さまに感謝すると同時に、鯖江市立待地区が、日本全国の人々に広く認知されつつあることを、誇りに感じております。

今回の応募作品もこれまで同様、時代物、学園物、SFなどバラエティに富んでおり、鯖江市と恋話の相性の良さを感じました。鯖江市に関わる題材としては、やはり、メガネが全体の45%を占め、西山公園、越前漆器と続きました。その中で、西山動物園のレッサーパンダ絡みの話が多かったことは、今回特筆すべき傾向でした。

西山動物園の職員に話を伺うと、レッサーパンダは園の動物の中でも特に人気があり、レッサーパンダに特化したインスタも上げているとのこと。そうした園の発信の努力が背景あり、レッサーパンダの推し活をしてくださっている

方が全国にたくさんおられるとお聞きし驚きました。また、西山動物園は、今年四月、開園50周年を迎え、メディアに頻繁に取り上げられました。そのことも合わせて、鯖江市の小説の題材にレッサーパンダを取り上げるきっかけになったのだらうと納得しました。

もう一つご紹介したい題材が、「おせっ会おもてなし隊」のことです。サンドームでコンサートが開催されるたびに、鯖江駅の前で来場者をサポートする活動が続けている方々のことは鯖江市民ならよく知っています。他県の方が小説の題材として注目してくださったことは、鯖江市民の温かさが確かに伝わっている証だと嬉しく思いました。

こうした鯖江市に関わる題材を自然な形で上手く恋話に組み入れた作品を、今回も入賞作品として選びました。恋話としての展開があるか、感動があるかなど、審査の観点はいつも同じですが、今年は初めての試みとして、若者の感性を取り入れるために、新しい審査員を大学生から公募し加わってもらいまし

た。チラシに審査員大学生と記載されていたことが功を奏したのか、若い世代からの応募が増えたことも、今回の嬉しい傾向でした。

入賞作品をお読みいただきながら、鯖江市の歴史とそこに生きる人々の暮らしを感じ取っていただければ幸いです。

応募作品462点を全て読み、色んな恋花を楽しませていただきました。鯖江を作品に取り込むということで、メガネ、西山公園、近松、河和田塗に関してが多い中、近松賞『三里山の幽霊』は80年前の福井空襲を題材に、大学生の主人公が曾祖父の悲恋を知る物語で秀作でした。

優秀賞の『恋する龍は虹に舞う』は河和田塗を題材に『雨龍記』の伝説を現代に甦らせた作品で色彩豊かで印象的な作品でした。

佳作の『七曲り心中』は十二歳の近松を登場させ心中物とした作品でこの文学賞に相応しいものでした。

入選されなかった作品の中にも素敵な恋花があり、さらに推敲しチャレンジしていただけたらと思います。応募をお待ちしています。

「リアル」と「テーマ」と「表現」

各作品を読み感じたことは、小説のリアルさです。小説に登場する人物のリアルさです。たとえ虚構であっても、このような設定であれば、このように人物は考え、行動するだろうということが、自然に感じられたかということです。虚構のリアルさだと思います。現実以上にリアルに感じられる小説が、リアリティのある小説だと思います。

第二に「書きたいテーマ」です。小説は、最終的には伝えたいを伝え、書きたいことを書くことだと感じました。各作品とともに、書きたいことを書き、訴えるものがありました。訴えるテーマがあるので、繰り返し読むと、その作品の奥底に流れるテーマが読み取られ、その奥深さが私の心を打ちます。

第三に表現です。言語には多義性があり、それはそれで面白いのですが、伝

えたいときは、しっかりした日本語で書く必要があると思います。表現の問題は、書かれた作品を音読すればわかります。各作品を提出するとき、再度音読されるとどうでしょうか。何か、言葉がつまる、何か違和感があるというとき、別の表現もありうるのではないかと思います。

以上の点をもとに、来年度も新たな作品の創作に挑戦していただきたいと思います。

◆講評・審査員

松本 実夕

浮山館長さんからお声がけをいただき、地元の活性化に貢献したいという思いから、審査員を務めさせていただきました。

審査員として、応募総数462点という膨大な作品を、大学の休み時間を使って読む日々、大変さを感じることもありました。しかし、それ以上に、作

品の中の情熱や深い愛情を感じ、読み進めるうちに、私自身の地元愛がより一層深まったように感じます。

作者の多種多様な視点や創造性が、見慣れた景色や出来事が素敵な物語となっていることに感動を覚えました。このような貴重な機会をいただきありがとうございます。

目次

◆受賞作品◆

◆講評・特別審査員 藤岡 陽子

◆総評・審査員長 水間 貴子

◆講評・審査員 三田村 悦子

◆講評・審査員 林 哲治

◆講評・審査員 松本 実夕

目次

「三里山の女幽霊」 原田 なぎさ (東京都品川区)

「恋する龍は虹に舞う」 藤森 弘 (長野県岡谷市)

「めがね屋の女房」 久保田 裕子 (東京都武蔵野市)

「近松門左衛門が転生したら、どうするか？」

露崎 和寿 (静岡県浜松市)

「思い出めがね」 安藤 良章 (神奈川県横浜市)

「七曲り心中」 西村 一江 (山口県山口市)

見聞録 近松の里 たちまち

■さばえ近松文学賞 恋話 (KOIBANA) 2025 主催者

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載しており、校正・校閲などの編集は加えておりません。

「三里山の女幽霊」

原田 なぎさ

（東京都品川区）

「さんりやま じょゆうれい三里山の女幽霊」を知ったのは先週だった。

大学の前期試験が終わり、悪友に、夏休みのアルバイトをどうしようと持ちかけた。「いや、俺は児童施設で読み聞かせのボランティアをする」と胸を張られた。俺と同様、親からの仕送りを居酒屋やパチンコで溶かすようなポンコツだ。そんな志があるなんて、聞いたことがない。

「——なるほど。それが世にいうガクチカなのね。まだ二年生なのに大変だ」その夜、LINEの通話で幸代は笑った。学生時代に力を入れたこと——就活で尋ねられる「ガクチカ」は、意識して仕込むものらしい。

「啓ちゃん、子どもの頃はお巡りさんって言ってたけれど、今は何になりたいの?」

「まるでわからん。お前はケーキ屋さんだったっけ?」

「保育士」

「実際と全然違うじゃねえか」

「職場で毎日、子どもみたいなおじさんたちを世話してる」

幼なじみは二年前、高卒で就職した。病気がちな母親を支えるためだ。農機を扱う販売会社の日常が、目に浮かぶ。俺はそんな故郷に物足りなさを感じてしまい、東京へ進学した。何者かになりたかったはずなのに、まだガクチ力すらも見つけられない。

「で、本題。さっき送ったCDは開いてくれた？」

「ああ。このサイト、随分古いし工夫もねえな。全国の都市伝説が北から順に並べられているだけだ」

「その方が、むしろそれっぽくない？」

「三里山の女幽霊」は【福井】の項に二行だけ紹介されていた。「セーラー服にモンペ姿で祈りを捧げる少女の霊。鯖江市と越前市にまたがる三里山（標高346メートル）に現れる。目撃談は7月19日から20日に集中している」

幸代はモキュメンタリー・ホラーに影響され、あれこれ検索しているうちに、このサイトを見つけたらしい。ドキュメンタリーのように創られた小説や映画

のことだ。ここ数年流行っている。

「こんな話、聞いたことねえぞ」

「私も初耳。親も職場のおじさんたちも『知らない』って言っていた。それで、繁しげさんに訊いてみたいと思ったのよ」

繁しげ爺は父の祖父だ。俺から見ると曾祖父になる。昭和六年生まれの九十四歳。昔は眼鏡部品の職人だった。妻を亡くし、子どもたちも歳を重ね、五年前、うちの親が引き取った。

「お元気なんですよ？」

「体はな。大抵のことは自分でできる。でもしよっちゅう記憶がまだらになる」

「なら啓ちゃんと同じじゃない」幸代は笑って言葉を続けた。「ねえ、夏休み、鯖江に戻ってこない？」

福井で新幹線からローカル線に乗り換えて、日の入り直前、鯖江に着いた。仕事終わりの幼なじみが、軽自動車で迎えてくれる。

「三連休前日の金曜なのに、駅前に人がいねえな」

「特急がなくなったからね」アクセルを踏み込んで、幸代が言う。

車窓から七月の夕陽に染まった三里山が見えた。カタクリの群生地や古墳、展望台があり、四季を通じてハイキングを楽しめる。麓が一周十二キロだからその名がついた。北側の一角を新幹線のトンネルが貫いている。北陸線がハピラインふくいと名前を変え、JRの特急が廃止されたのは、金沢から敦賀まで新幹線が伸びたからだ。

「お帰り啓太。あら、幸代ちゃん、久しぶり」実家に着くと、玄関で母ちゃんに出迎えられた。遅れて出てきた父ちゃんも「幸ちゃん、綺麗になったなあ」とスーツ姿に目を細める。

「東京じゃ、今どきそういう言い方、アウトだぜ」

「いいって啓ちゃん、綺麗なのは本当だし」幸代は悪戯っぽく舌を出し、「おじさん、おばさん、こんばんは。繁さんはご在宅ですか？」と尋ねる。

「お風呂に入って、ご飯食べて、今さっき寝たところ」母ちゃんは苦笑した。まだ七時半だが、老人の夜は早い。幸代はすんなり引き下がり、「じゃあ明日

また出直します」と帰っていった。

「幸代ちゃん、誰かい人いるのかしら」

「知らねえよ」

「そうなんだ。幼なじみの特権に甘えていると、大切な縁を失うかもよ」

一人息子を二瞥し、母ちゃんは含み笑いだした。

翌十九日、幸代は再びやってきた。ジャージ姿で安楽椅子に体を収めた繁爺は、彼女を見つめ「どちらさん？」と問いただす。

「啓太さんの友だちの山本です。山本幸代」

「ああ……幸ちゃんか。大きくなったな」

「啓ちゃんと同じ二十歳です」

「もう二十歳？　今年は昭和何年だったかな？」

「今は令和」と俺は横から口を挟んだ。年上に慣れた幸代はまるで動じず、

「そうですね、昭和だったら百年です」と笑顔で答える。

「昭和百年」繁爺はもごもごと繰り返し返し、「終戦から八十年か」と目を細めた。

「生き字引の繁さんに、訊きたいことがあるんです」

「何じゃ？」

『『三里山の女幽霊』ってご存じですか？』

幸代はサイトの記載を説明した。繁爺は黙って耳を傾けている。怪しげな都市伝説だ。知るわけないか、と思っていると、予想外の言葉が返ってきた。

「心当たりがある」

「マジで？」驚いて問い返す。繁爺は窓の外に目を向けた。平地が多い鯖江では、どこからでも三里山が眺められる。

「幸ちゃん、啓太。あの山の下に工場があったことを知っているか？」

「本当ですか？」と幸代が応じた。「小学校で郷土史を習いましたが、そんな話は聞いていません」

「そうじゃろうな。史料はほとんど残っていない。極秘の軍需工場だったからだ」

繁爺が語り出す。

戦争末期、日本は制空権を失った。米爆撃機B29は全国的主要都市や軍需

施設に焼夷弾の雨を降らせた。慌てた軍部は各地で地下工場の建設を企てる。

「その一つが三里山だった。あの山のほとんどは火山岩でできていて、頑丈じゃからな。戦闘機の部品を造るため、網目のように岩が掘られた。半島からの労働者たちが突貫作業を強いられた。だが終戦までに間に合わなかった」

岩盤があまりに硬く、建設途中で放棄された穴があった。偶然見つけた近くの子どもが「秘密基地」にした。

「繁さん、その子はもしや？」

繁爺は微かに頷く。「国民学校高等科を出る歳だから、わしはまだ十四歳だった。親の目を盗んでは、基地に通った。同級生の可憐な少女に恋していた。初恋だった。蝋燭ろうそくの灯りを頼りにお喋りした。その時だけはひもじさも、窮屈な日常も忘れられた。あの日までは」

繁爺が遠くを眺め、黙り込む。「……今夜、三里山に連れて行ってくれんか。最近、記憶が霞んでいけない。二人のおかげで大事なことを思い出した。このままじゃ、お互い死んでも死にきれん」

半分欠けた月の明りが、国道を照らしている。「その先を左折して、浅水川あそうずがわの橋を渡り、山の麓の突き当りまで進んでくれ」繁爺が、軽自動車の後部席から指示をした。幸代は頷き、ハンドルを左に切る。ほどなく緑樹が行く手を阻んだ。路肩に停めた車から、繁爺を背中に背負って外に出る。幸代がフラッシュライトを点灯した。蒸し暑く、虫の音がやかましい。

「あそこだ」繁爺が細い右手を前に突き出す。目算で十メートルほど先。背の高い草木の隙間から、四角い穴がのぞいていた。想像よりもずっと大きい。

「ここがいい。これ以上は近づけない。おろしてくれ」

俺と幸代は繁爺の左右に立ち、腕を支えた。「あの日も夕刻、わしは彼女とここに来た」

繁爺は国民服、彼女はセーラー服にモンペだった。「今日はあんまり時間がないんだ。これから母が生まれた福井に行くの」と少女は言った。鯖江とは十五キロの距離がある。親戚を訪ね歩き、反物たんものと食べ物の交換を乞うためだった母の実家で一泊し、翌二十日、鯖江に戻るといふ。

「みじめだよね。何で大人は戦うのかな。非国民って言われても、やっぱり私

は平和を祈るよ。ねえ、繁さん。いつかそういう未来がきますよね？ 昭和百年ぐらいになれば、きっと世界の誰もが仲良しですよ？　こそこそせず、好きな人と会えますよね？」

繁爺は泣いていた。「彼女は帰ってこなかった。その深夜、福井は業火に包まれた」

そこでようやく俺は気づく。空襲だ。八十年前のこの時間、福井に無数の爆撃機が飛来した。市街地の九割以上が焼き払われ、一五〇〇人を超える尊い命が奪われた。

「……あれ」と幸代が息を呑む。暗い穴のその先に、白くて淡い光を放つ少女が浮かんでいた。両手を合わせ、柔らかに微笑んでいる。

「ごめんな、わしだけこんなに生き永らえて。ほかの女と所帯も構えて。お前は毎年命日に、この場所で、独り祈りを捧げていたのに――」

少女は小さく首を振り、瞳を閉じた。薄い体が深い闇に溶けていく。綿菓子をつっかり水に落としたようだ。繁爺が名前を呼んだ。よく聞き取れない。駄々をこねた少年みたいな声だった。

「もっとゆっくりしていけばいいのに」

翌日の鯖江駅で、幸代にシャツを引つ張られる。「東京に戻っても、やることないでしょ？ それとも会いたい女子でもいるの？」

俺は笑って首を振る。「バイト探すとガクチ力やらなきや」

「へえ。何かやりたいことを見つけたんだ」

「まあね。そのうち言うよ。だからそれまで、気兼ねなくLINEできる関係でいてほしい」

「せっかく送ってあげたのに、宙ぶらりんを迫るんだ。あのさ、私は先に死んだら絶対祟るよ」

拗ねた彼女の肩を叩き、改札を通り抜ける。

今朝、繁爺に「ところであなたはどちらさん？」と尋ねられた。昨夜のことをどこまで覚えているのだろう。どっちでもいいか、と思い直す。「俺はひ孫の啓太だよ」と答えると、「そっかそっか」と破顔した。憑き物が落ちたような顔だった。

ハピラインの車窓から、三里山が遠ざかる。あの戦争から八十年。昭和百年になってさえ、世界は争いに満ちている。それじゃいけない。大切な幼なじみとの縁のためにも。

ポケットからスマホを取り出し、ブラウザを立ち上げた。検索窓に「平和ボランティア」と文字を打ち込む。

「恋する龍は虹に舞う」

藤森 弘

（長野県岡谷市）

春の終わり、西山公園のツツジが満開を迎えるころ、鯖江の空はにわか雨のあとの陽射しで、やわらかな虹を描く。

その朝、結は祖母の手を握っていた。手は瘦せて、まるで薄い漆器のように冷たかった。

「…あんたには、見えるはずや。あの子が」

それが、祖母が最後に発した言葉だった。

火葬場の煙が空に昇っていくのを、結は黙って見送った。まだ高校二年の春だった。河和田の山あいにある古い家で、結は祖母とふたり暮らしをしていた。両親は早くに離婚し、父は海外勤務、母は行方知らず。祖母は伝統工芸士で、越前漆器に命を注いできた人だった。

葬儀のあと、仏間の整理をしていた結は、漆で書かれた奇妙な文字の並ぶ巻物を見つけた。「雨龍記うりゆうき」と墨書されたその断簡は、黒光りする和紙に赤漆で

描かれていた。絵柄には、虹に包まれた龍の姿――。そして、龍に抱かれるひとりの女が描かれていた。

「何、これ？」

その夜、雨が降った。雷が遠くで鳴り、障子を打つ雨音の中、ふと結は、誰かの視線を感じて振り返った。

そこに、ひとりの少年が立っていた。

銀の髪に、透き通るような虹色の瞳――。まるで空の端にかかる幻のような存在だった。

「ようやく、見えるようになったのだね」

少年は、そう言って、やさしく微笑んだ。

「おれは、アマ。この町に封じられた『雨の龍』。きみの祖母は、ぼくのことを知っていたよ」

結の胸の奥で、何かが静かに軋んだ。これは、現実なのか？ 夢なのか？ いや、どちらでもない。たぶん、これは――祖母が遺した「物語」の始まり。

西山公園の夜空には、雨の名残を照らして、ひとすじの虹が浮かび上がっていた。

翌朝、空はよく晴れていた。

昨夜の出来事が夢だったのか、それとも現実だったのか、結にはもう判断がつかなくなっていた。ただ、布団の脇に濡れた足跡が残っていたことだけが、何かを証明していた。

学校の帰り、結は西鯖江駅から歩いて「めがねミュージアム」に立ち寄った。祖母がかつて展示の監修をしていた漆塗りフレームのコレクションを見たくなったのだ。鯖江は日本一の眼鏡の町。その誇りは、この場所に詰まっている。職人たちの手仕事、繊細な研磨、独特の光沢。漆器の伝統は眼鏡にも活かされていた。

ふと、奥の体験コーナーに視線を向けると、昨日の「あの少年」がいた。銀の髪は陽を受けて淡く光り、虹色の瞳がレンズの反射に溶け込むように揺れていた。結の心臓が、ひときわ大きく跳ねた。

「やあ、また会えたね」

少年—アマは、ガラス越しに笑った。

展示品には触れられないはずなのに、彼はまるで空気のようにその中に入り込み、自由に歩いている。

「ほんとに、龍なの？」

結は問いかけた。

「正確には、龍の記憶」かな。鯖江に伝わる昔話、知っている？ 山の上に住む雨乞いの乙女と、湖に棲む龍神の話。人に恋をして、天に召された龍の話さ」

結は、うつすらと頷く。

小学生の頃に読んだ地元の紙芝居。西山公園の展望台から見下ろすあの町には、そんな伝説がひっそりと息づいている。

「でもね、その話には 本 当の結末 が あったのだよ」

アマは、そっと近づいてきた。

「その乙女—名前は タ ^{ゆう} だって言った。きみの祖母の祖母、さらに祖母にあた

る人だよ。彼女は、龍を封じるために物語を一枚の漆器に描いた。けれど未完のまま、その記憶は忘れ去られていった」

結の喉がかすかに鳴った。

あの巻物——「雨龍記」。そして、そこに描かれていた女と龍。

「あなたを……解放するには、どうすればいいの？」

アマは、そつと答える。

「物語を、最後まで描いてほしい。あのとき、未完だった心中譚の続きを。きみが結び手になれば、ぼくは自由になれる」

外は小雨が降り出していた。太陽が雲間から顔を覗かせ、雨粒のひとつひとつが七色の光を宿している。結はそのとき気づいた。アマの姿が、少しずつ透け始めていることに。

「ねえ、わたしがあなたに……恋したら、どうなるの？」

アマは微笑んだ。それは悲しみとも、祈りともとれる表情だった。

「そのとき、ぼくは消えるかもしれない。でも、それが物語ってものさ。ぼくらは、そうしてしか存在できない」

めがねミュージアムの外には、再び虹がかかっていた。

その夜、結は河和田の家にこもり、祖母の遺した道具箱をひとつずつ開けていった。朱漆の筆、金粉の包み、そして黒漆の乾いた香り。どれも、祖母が生きていた時間の手触りだった。

巻物「雨龍記」の中ほどに、かすれた筆致でこう記されていた。

「此龍、恋ヲ得シ時、皮膜ヲ越ユ。然レドモ恋ハ幻也。実ニ非ズ。故ニ、恋ニ落チシ時、龍ハ影トナル」

結はそつと筆を取り、膠を溶きながらつぶやいた。

「皮膜を越える……？」

その言葉に、背後から返事があつた。

「虚実皮膜って言葉、聞いたことある？」

振り向くと、アマがそこにいた。

障子の影から差す月光の中、彼はまるで紙のように薄く、光の加減で姿を曖昧にしていた。

「江戸時代、近松門左衛門っていう劇作家が言った言葉さ。芸とは、うそ虚とまこと実の間、ちょうど皮一枚のところにあるって。ぼくは、その皮膜に生きている。きみがぼくを信じた瞬間だけ、この現世に形を持てるのさ」

結は静かに目を閉じた。これは夢でも幻でもない。けれど、現実と呼ぶにはあまりに脆い。そんな世界にアマは囚われている。

「どうして、そんな姿に？」

アマは小さく微笑む。

「三百年前、近松が心中物を書きすぎて、心中が流行った。幕府はそれを禁じた。ぼくらの物語も、完成する前に書き換えられたのだよ。本当は、龍と人が愛し合って、結ばれるはずだった。でも、皮膜の奥に押し込められて、忘れられた」

そう言っアマは、結の手をとった。ひんやりとしていて、でも確かに、そこには体温があった。彼の存在が少しずつ「実」に変わっていくのがわかった。

「だったら――」

結は言った。

「わたしが、最後まで書く。この物語を、ちゃんと、終わらせる」

アマの瞳が揺れた。虹のような光がにじむ。

「そのとき、ぼくが消えても？」

結は頷いた。

「あなたが消えても、残るものがある。物語。伝説。恋の記憶。それが、私たちの“ほんとう”なんですよ？」

しばらくの沈黙のあと、アマは言った。

「じゃあ、結――始めようか。ぼくらの、最後の一章を」

空には虹が浮かんでいた――夜の虹。ふつうなら見えないはずのその光が、結の目にははっきりと映っていた。

文机に広げた漆板の上に、結は筆を下ろす。細く、震えるような線で、ひとつずつ、アマの姿を描いていく。龍の尾のような銀の髪。虹を閉じ込めた瞳。降りしきる雨の中、静かに誰かを見つめている姿。

「これは、心中なんかじゃない。誰も死なない。誰も消さない。でも、伝えるの。あなたがここにいたことを」

結は呟きながら描いた。

そして、最後に「結」の名を記す瞬間。アマが、背後に立っていた。

「ありがとう、結。だけど、もう時間だ。きみの心がぼくを『実』に変えすぎた。この世界に長く存在しすぎると、均衡が崩れる」

アマの身体が、透けはじめていた。まるで雨粒が光に溶けていくように、彼の輪郭が空気の中にほどけていく。

「嫌だよ、まだ話してないことがたくさんある。一緒に西山公園のツツジを見たい。レッサーパンダの赤ちゃんだって」

結は叫んだ。けれどアマは微笑んで、ゆっくりと首を振った。

「恋ってね、ただ一緒にいることじゃない。忘れないっていうこと。それが二人の物語になるっていうこと」

アマはそっと結の両手を取った。彼の掌は冷たくて、でもどこまでもやさしかった。

「ぼくは、虹になる。空に浮かんで、雨と陽射しのあいだに立って、君のことをずっと見ているよ」

そのとき、外で雷鳴が轟いた。激しい雨と陽光が交差し、空が裂けるようにして七色の光が走る。そして、彼は消えた。

跡にはただ、漆器に描かれた一匹の龍の瞳が幻のように光っていた。

恋する龍は、今日も虹に舞っている。

ちりりん。店の入口に付けたベルが鳴る。

妻と昼を食べていた翔が、店の奥から顔を出し、客の応対をする。

鯖江駅近くの路地裏にある間口一間ほどの店の軒下には、メガネ型のロゴと店名が抜かれた小さな看板が見える。オープンから二年。いい具合に変色している。店名のno sideは、学生時代にラクビー部のマネージャーだった妻、あゆみの提案だ。試合終了して敵も味方もない状態の事と知り、翔はすぐさま賛成した。

三人も入ればいっぱい店内の設えはシンプルで、コンクリート打ちっばなしの壁には翔がデザインしたメガネが飾られ、狭いながらもエッジの効いた空間である。昼はあゆみが持つてくる弁当と一緒に食べるのが常だ。

芋の煮っころがしをほおばり、あゆみは今日も時折ざわつく自分の胸に問いかけていた。鯖江の生活にも慣れてきたし、お店も落ち着いてきた。幸せなはず

なのに、私は何に引つかかっているんだろう。

店先から翔の声が聞こえてくる。

「チタンもええんですけどね。これ、どうやる？チタンよりちょっと重たい合金なんですけど、昭和の頃は高級素材って言われとってね。この渋い光り方と、無駄のないデザインで、最近また人気出てきてるんですよ。」

親の反対を押し切って東京の美大に行き、グラフィックデザインを専攻していた翔。メガネデザイナーという職業は、夢を貫くか、家業を継ぐかという岐路で、彼が出した苦渋の折衷案であった。そんな翔が祖父の代から作ってきたサンプラチナのメガネを推していることに、あゆみの胸は熱くなった。

「あゆみー」

翔の声がして、あゆみが顔を出すと、がっしりした身体をかがめてショーケースを覗く男の輪郭が見えた。ほっそりした翔とは対照的だ。

「雨、だいぶ強なってきたし、車で福井のホテルまで送ってあげてんか？出張で酒蔵回つとられるって」

あゆみに客の名刺を見せながら翔がよそ行きの笑顔を作る。男は「店の名前が

気になって」と言い、顔を上げた。

親譲りの職人気質の翔が、慣れない接客に奮闘している姿を微笑ましく思いながら、あゆみは名刺と客の顔を見て「あつ」と心の中で叫んだ。丸星物産海外事業部・セールスマネージャー？

男を助手席に乘せ、あゆみが車を走らせると、店を出てから終始無言だった男が口を開いた。

「あゆ、だろ？」

「え？分かってたんだ」

「五年経つても、髪切つても、メガネに変えても、分かるさ」

「旦那の前では、気づかないふりしてたんだ」

「やっぱり、さっきの人。結婚したんだな？」

「うん、三年前。こっちに來て二年」

「そうか、三年前か」

「圭介は？」

「俺はまだだ。あゆと・・・」と圭介は言いかけた次の言葉を飲み込んだ。

ホテルに着くと、圭介は名刺の裏に携帯番号を走り書きしてあゆみに渡し、

「東京に来るなら連絡しろよ。奢ってやるから」と言い置いて車を降り、雨の中をすたすたと行ってしまった。

圭介の後ろ姿をホテルの中に消えるまで見送り、あゆみは大きく溜息をついた。あゆみの胸に「あの時」のことが鮮やかに浮かび上がってきた。ずっと心の奥に封印していた「あの時」のこと。切なさと後悔……。時折感じていた胸のざわつきは、このせいだったのか？

「今日のお客さん、体格よかったなあ。ラグビーでもやってたんかもしれんな」

晩ごはんのあと、不意に翔が口にし、洗い物をしていたあゆみの手が一瞬止まった。「ああー、そうかもねー」とあゆみは乾いた声で返した。

その日から半月ほど、どことなく落ち着かない妻の様子を訝しく感じながらも「同窓会へ行く」と言うあゆみを翔は駅まで送った。メガネを外し、トレンチコートを羽織り、いい香りを残して颯爽と歩き出す妻の姿に、あゆみを地元

連れてきたことを少し悔やんだ。

「あゆみ、東京に戻りたなつとる？・・・違うんか？」

二年ぶりの東京は、そこそこに新しい高層ビルが建ち並び、姿を変えていた。急速に変容していく様子を目の当たりにして、東京育ちのあゆみは、この街から見放されていくような寂しさを覚えた。

自分の気持ちも、圭介の気持ちも確かめないままに過ぎていった五年の歲月。煮え切らない圭介と別れ、お見合いも上手くいかず、結婚を諦めた頃に翔と出会った。恋に落ち、結婚して、二人で鯖江のメガネ店を継ぐと決めた。後悔はない。翔との暮らしは穏やかで心地良く、幸せに過ぎている。けれど、時折胸がざわついていた・・・それを終わらせるために東京にやって来たのだと、ホテルの部屋でシャワーを浴びながら、あゆみは高鳴る胸に言い聞かせていた。

「おまえ、まだそのコート着てるのか？」

開口一番の圭介の言葉に笑い合いながら、

二人で幾度が行ったレストランに入った。

ワインボトルが空になる頃、圭介が突然、声のトーンを落とし、おもむろに切り出した。

「俺じゃダメだったのか？俺はあゆと結婚すると思ってた」

「そんなこと、一度も言ってくれなかった」

「言おうとしたんだよ。海外勤務が決まった時に。でも先に、見合いするって言われて、言えなかった」

圭介の言葉を胸の中で咀嚼しながら、あゆみの気持ちはタイムスリップしていた。

「あの頃、そっちがめっちゃめっちゃ忙しくなって、なかなか会えなくて・・・自信なくして、お見合いに逃げた」

「そおかー」

「自分の気持ちをちゃんと伝えなかったこと、ずっと悔やんだ」

「俺もだ」

「部屋まで送るよ」

圭介はふらつくあゆみの腰を支えながらタクシーを呼び止めた。ホテルの部屋の前まで来ると、あゆみはくると扉に背を向けて、圭介と向き合った。

「あの時、キスを拒んだことも悔やんでる」

「あれが、一番ショックだったな」

「圭介の気持ちに分からなくて、中途半端な気持ちじゃ嫌だっと思って思っちゃって・・・」

圭介は、潤んだ瞳で見つめるあゆみを抱き寄せ、「あの時」あゆみが一番聴きたかった言葉を耳元で囁いた。

「あゆ、好きだったよ」

「私も好きだった。あの時に戻りたい」

圭介は、あゆみをしっかりと抱き締め、頬の涙を拭い、唇を重ねた。「あの時」を取り戻すかのように・・・。

「ありがとう・・・」

泣き顔に笑みを浮かべ、あゆみは圭介の腕をほどいた。そして気持ちを切り替えて、はつきりと言った。

「これでもう思い残すことはないです。今のは、タイムスリップした過去の私だと思ってください。」

圭介もあゆみの気持ちを察し、「分かった」と言っ腕を離れた。

「今の私は幸せだから」

「あゆが幸せならいい。俺はまた最後のゴールを外したな」

「鯖江は小さな地方都市だけど、翔は鯖江から世界を、未来を見てる。鯖江のメガネをかけたなら分かるから」と言っ、あゆみは精一杯の笑顔を見せた。

圭介はあゆみの頭に手を乗せ、「めがね屋の女房になったんだな」と顔を覗き込みながら言った。

去っていく圭介の背中を目に焼き付け、あゆみは「ありがとう」と漏らした。圭介の姿が消えると「終わった」という言葉とともに長い息を吐いた。

すつきりとした青空が広がる朝。翌日、あゆみは晴れやかな心持ちで東京の

街を巡った。

ふと、レモンイエローのコートに目を奪われ、それをまとつて鯖江駅に降り立った。

吹っ切れたような妻の笑顔を目にして、車で待つ翔の懸念は消えていた。

「ええコートやなあ。よう似合つとるわ。」

「ありがとう。今夜は翔の手料理が食べたいな。」とあゆみは翔に甘える。

その夜、あゆみは翔と二人の時間を味わい尽くした。

次の朝、翔を送り出すと、あゆみは卒業アルバムを開いた。全国大会で準優勝を果たしたラグビー部の写真。中央には盾を掲げた主将の圭介が写っている。最後のゴールを外し、泣き腫らした圭介の顔をあゆみは愛おしく見つめた。ぼとり。古いポストカードが落ちた。

「ニューヨークに住む人生もあつたんだな」

あゆみはしばらくそれを眺め、静かに破いた。自由の女神も、圭介の読みにくい字も、小さく小さくちぎりながら、こぼれる涙をぬぐいもせずに。そして、ぼつりと漏らした。

「めがね屋の女房かー」

圭介との想い出も、今の翔との幸せも、どちらも大切なもの。

「ノーサイド！」

そう言って、あゆみは涙を拭いた。

「近松門左衛門が転生したら、どうするか？」

露崎 和寿（静岡県浜松市）

「どうするか？ そりゃ作品をボツにするよ、編集者が誰かが」

強烈な寒波が引いては寄るその冬の、二月のある日。雪を含む風が教室の窓を割ったようなセリフを、椅子に座ったまま肩のストレッチをしていた男子、伊布岐蓮が口走った。

「おまわりさん、この人です！」

「郷土の偉人侮辱罪で逮捕する！」

裸眼女子がツツコミ、眼鏡女子もツツコミ。

この雑談の発端は、裸眼女子の佐々木佐保。鯖江市役所JK課所属の佐保がいわく、「近松門左衛門が現代に転生したら、どうするか？」を考える宿題が課で出たと。

受けてマイペースなイケメン蓮が冒頭のセリフを口走り、佐保と、この男子

に片想いしている眼鏡女子の酒井凜がしょっぱいたという次第だ。

「だって少子化でモメてるんで、心中モノが若者に流行ったら困るじゃん」

「近松は他にもいろいろ書いたし、社会の雰囲気を読む天才なんだから三百年後だって読むに決まってるでしょ」

佐保がまたツッコむと、蓮は悪びれずに言った。

「じゃあ動画配信者として成功するんじゃないか？ 歌ってみたとか、サバエドッグ食べてみたとか」

「もう別人だよ」

凜もツッコんで笑って、佐保も笑った。

……蓮はこんな感じの男子だが、眼鏡女子の凜はこの蓮に恋している。蓮は顔も、背丈も男子の上位。文武両道で剣道二段、インターハイでも実績あり。文しか無いのに文で劣る凜は、そんな蓮と高校に入って知り合い軽口を叩き合える関係に至ったが、既に過ぎ去ったバレンタインデーには何もなかった。というか、蓮はフリーだが元カノジョ——凜も顔と名前は知っている、別のクラスの美人——がいて、その元カノジョが別の高校の男子と別れたということ

で蓮と寄りに戻すのではないかと噂され、凜はただ悩んでいるところだった。

凜は、蓮を見ながら話した。

「私は、来世で結ばれたいと願って心中したふたりの気持ちだが、現代を来世として叶えられる物語を書いてほしい」

凜の言葉どおり、心中は来世で結ばれるのを願ってされたという。近松門左衛門が生きた三百年前は、現代よりずっと不自由だったのだらう。現代も完璧とは遠いが、当時からすれば生まれてきたい来世のはずだ。

「いいね！」

佐保が同調してくれる。が、蓮は同調しなかった。

「ミステリー小説は俺も好きなんだけどな。オカルトや魔法が本物なら、佐々木もすぐに数学満点、酒井も視力二・〇なのにな」

「オカルトというか、女子はロマンティックなのやサプライズが好きなの」

佐保が反論すると、蓮はかわすように言い出した。

「そういえば、酒井の眼鏡ってどれぐらい強いんだ？ 眼鏡貸してくれ」

「えっ、えっ？ 何その話の流れ？」

それから凜がうろたえているうちに蓮のペースで眼鏡を持っていかれて、凜の視界がボヤけて、レンズに指紋を残して戻されるはめになった。

「レンズに触らないでよ、バカ」

蓮に眼鏡を試用されて喜びながらも、眼鏡ユーザーの気持ちを全然解ってくれていないことに傷ついて、凜は笑いながら怒った。来世での再会の話、裸眼の素顔がスルーされたことにも傷ついた。

以前から蓮とは楽しくしゃべってきたが、全然尊重されていないと思う場面もときどきあった。

それでも、髪に何か付いている、と指摘されて取ってもらったりすると、凜はやはりものすごくドキドキとすることに気づくのだった。

鯖江盆地の冬は厳しい。それは鯖江市のもののづくりを発展させたことで有名だが、ともあれその雪も四月にはさすがに去った。

凜は高校二年生になって、年度の新調にやや遅れて眼鏡も新調した。目の使い過ぎで、視力が落ちていたからだ。

なお、以前に眼鏡をぞんざいに扱われた件は、凜自身、たとえば全盲の人の気持ち解るか？ 車椅子の人の気持ちが解るか？ などと自問したところ、自分も誰かを責められる立場ではないと考え直していた。自分だけが当然に解ってもらうことを求めて、勝手に傷ついていたのだと。

というわけで、蓮とまた同じクラスになって喜びながら、凜は片想いを続けていた。

そして、五月が近づいてくるある日。帰りがけの凜は、依然とフリーらしい蓮に、思い切って声をかけた。

「伊布岐くん、ツツジ祭りに行く予定ってもうある？」

ツツジ祭りというのは、鯖江市の歴史ある大きな公園、西山公園における、毎年GW恒例のイベント。日本海側最大級、五万株のツツジが咲いて、大勢の人たちが訪れるあれだ。

「おっ、誘ってくれるの？」

蓮が笑顔で応えて、凜もうれしくなって答えた。

「うん」

「今のところのメンツは？」

「あ、えっと……まだ決まってるじゃないけど、たぶん佐保と葵ちゃんと……」

「じゃあ男子を俺が見繕うか」

日時その他は追って具体化することにして、話はふっと凜の視力のことになった。

「酒井はおもしろ動画ばかり見て視力が落ちるみたいだから、この機会にきれいな景色を見ないとな」

「ちゃんと他にも目を使ってるよ」

「動物動画」

「まあ見てるけど」

「なあ、新しい眼鏡借りていいか？」

「え？」

蓮が悪びれずに言って、凜は二か月前を思い出した。自分をないがしろにされたみたいな気持ちがい出された。

と、蓮は申し訳なさそうになって続けた。

「実は俺、前に酒井に文句言われてから、眼鏡をかけてる人たちのことしばらく調べた」

「そうなの？」

「眼鏡は自分の一部なので、大事に扱ってもらいたい」

「そう！」

「眼鏡をたたむときには、まず左のつるから折る」

はたして、蓮が調べたという話は事実かしかった。

「しょうが無いなあ」などともったいたいつけながら眼鏡を貸すと、凜の視界がボヤける。そして蓮が「ふらつく」「目は大事にしないと」などと声を出して、今度はレンズに触れること無く返してくれた。

凜は、自分をちゃんと扱い直してもらえたようで、幸福感を味わった。

その時、そこに声がかかった。

「蓮！」

凜が見ると、そこにひとりの女子がほほ笑んでいた。

「取り込み中？」

「おっと美優サマか」

背景にバラが三十輪ぐらい咲きそうな美人は、例の、凜にも顔と名前は分かる元カノジョ。この美優について、蓮が「実はそもそも好きじゃなかった」と口にしたことがあったのを凜はよく覚えていたが、ヴィジュアルで蓮と美優は実にお似合いだ。美優と比べれば凜は自分の背景にやっとタンポポを三本咲かせて、それもすぐにしおれそうだった。

「今度のツツジ祭り、もう予定決まってるの？」

「それが、まだ決まってるない」

にこやかな蓮の即答に、凜はショックを受けた。細かいことこそ決めていないが、蓮と凜が一緒に行くのは決めたばかり。自分が先約で確定したと思ったから、目の前で「決まってるない」と言われるとは思っても寄らなかったのだ。

「そうなんだ！　じゃあ私とふたりで行こ？　去年も楽しかったよね」

ねだる表情も愛くるしい。

「……私じゃまだから帰るね」

凜が背を向けて急いで立ち去ろうとすると、蓮から声が飛んできた。

「酒井！」

呼び止めてもらえて振り返ると、蓮は告げた。

「帰って自分の顔を見ろ」

バラのような美人から笑い声。

「何それイジメ？ 不登校になって中退したら、蓮の責任問題だよ」

そんな愉快そうな声を背後から聞かされながら、凜は急いでそこから離れた。

凜は自転車をこいで、学校を十分に離れると、我慢していた涙がこぼれた。

——よく笑顔で接してくれるから、自分にもチャンスがあると勘違いしてしまった。わざわざ眼鏡のこ
とを調べてくれたから、自分にもチャンスがあると勘違いしてしまった。

蓮から無神経に扱われる場面はときどきあったが、ここまでひどいことにな
るなんて思わなかった。コンタクトにすればいいのか。メイクで足りず、整形
も要るのか。お正月やお盆に顔を合わせると、「べっぴんさんになったね」と
と褒めてくれる大阪の祖父母。その顔が思い浮かぶと、申し訳無くてまた涙が
こぼれた。

人がいるところには行きたくないが、人氣が無いところにも行けない。家に着いた時に母を心配させたくなくて、気持ちを落ち着かせるために苦しんだ。

家に着くと、幸い、パートの母はまだ帰っていないかった。帰宅途中の買い物で、井戸端会議が長引いているあたりだ。

帰ってくる母に気づかれないか、泣いた跡がひどくないか確かめなければならぬので、洗面台の前に行く。

そして自分の顔を……みじめな顔を鏡に映すと、眼鏡フレームの中央、ブリッジの表側に、何かがあった。

鏡に顔を寄せるとそれは小さなシールで、ルビミみたいなサイズの、小さな文字が書かれている。凜は眼鏡を外して、向きを変えた。

それはきつと眼鏡を貸した時に貼られ、きつと凜の帰路三十分は貼り付いていた。

帰って自分の顔を見ると言われた凜は、凜の眼鏡という凜こそが認める「自分の顔の一部」を見て、やっとこの筆跡を読んだのだった。

前世から好きだ。レン

*

五万株のツツジの、白、薄紅、赤紫。
それを大勢の人たちと一緒に楽しんだ後、ふたりは西山公園の展望台に上った。

初夏に向かう太陽がまぶしい。

「三百年前から好きだ！」

蓮が叫んで、凜は恥ずかしさに焦った。

「わ、私の思い付きにそこまで乗ってくれなくて大丈夫だから……」

「文字がちっちゃ過ぎた分を取り返した！ さて、自由な未来で結ばれたいという願いが俺たちに流れ込んだ感じで、言い出しっぺのお凜も叫ぼうか」

「お凜って誰なの？ もう……三百年前から好きだ〜！」

眼下にふるさとの町並み、三百数十年前に近松門左衛門が生まれて過ごした

鯖江の町並みが広がる。視界に空も青くて広くて、山のずっと向こうにまで続く。

「大きな気持ちになる」

「うん」

「……俺たちも、三百年先まで残る偉人になるぞ！」

「なるぞー！」

凜も一応素直に復唱した後、蓮を見てツツコんだ。

「で、どんな偉業で？」

「大きく出過ぎたか」

ふたりは笑った。

「……ただ、とにかく」

蓮が凜を見つめてほほ笑む。

「とにかく、凜を何度も笑顔にする」

……凜の視界がにじんだ。

高台に、やさしい風が吹いていた。

母が死んだ。自室で脳溢血で倒れ、そのまま逝ってしまった。まだ六十八歳だった。元気な人だったので、人生のエネルギー配分を、その加減をちよっと間違ってしまったのだと思う。いまは人生百年時代なんだから、そんなに飛ばしたらだめだよって、そんな感じ。ちよっと大変な母親だった。といっても、暴力をふるうとか、ネグレクトするとか、過干渉の毒親とか、そういった母親ではない。ただ、ちよっと自由奔放というか、後先考えず行動するところのある人だった。父とは小学校六年生のときに会ったのが最後だ。父は浮気をし、相手の人と一緒になった。母は、「好きになったんだから仕方ないでしょ」とあっさり離婚した。養育費とか、そういったお金もあまり請求しなかったようだ。かといって母に収入があつたわけじゃない。母は私を産んで専業主婦になつていたので、離婚が決まって約十年ぶりに社会にカムバックすることになったのだ。うまくいくはずはない。私は横浜から、母の実家のある鯖江へと一人で

越した。母が生活の基盤を作るまで、中学校の三年間を私は祖母と二人で過ごした。祖母は母によく似ていて、美人でさっぱりとした気性の人だった。二人での生活はとても楽しかった。私はすぐに地元の子たちとも馴染み、楽しい学校生活を送っていた。

高校にあがる時点で、母の収入が安定してきたので、横浜に呼び戻されたが、ほんとは鯖江の友達と一緒に高校に通いたかった。しかし、私を呼び戻すために必死に横浜での生活を構築してきた母の願いを拒否できるはずがなく、横浜に戻った。母との生活も、またとても楽しいものだった。横浜の高校に通い、東京の大学と大学院に通い、中堅のゼネコンに勤め、一級建築士の資格もとった。同じ大学でおなじ会社に勤めていた先輩が独立することになり、誘われて小さな設計事務所で働くことになった。それが八年前、三十五歳のときのこと。今日、私は四十三になり、葬儀やら四十九日とか、そういったことから解放されてみると、「ああ、ほんとに一人になったんだな」という寂寥感がダムが溢れるかのように一気に襲ってきて、自分でも驚いている。こんなに寂しく、寄る辺ない気持ちになるなんて思ってもみなかった。

仕事だの資格取得だのに明け暮れ結婚はしなかったが、その分、仕事や収入は安定していて先の不安も少ない。一人で生きていく自信はあったし、そのつもりだったのに、準備もできていたのに。近所に住んではいるもののあまり会うこともなかった（電話は頻繁にしていた）母が死んだだけで、こんなにグラグラに不安になるなんて。母の死がショックとなり、一気に更年期障害が進んだ可能性もある。そうは思いながら、いきなり婦人科に行くのもなんだしなと思って、かといってなにかほかの対策を打つでもなく、鬱々とした日々をここ数か月過ごしている。

そんなこんなでよく眠れなくなった。体を動かせば疲れて眠れるかとも思い、夜に散歩をするようになった。仕事から帰り、八時とか九時頃から近所の山下公園をぐるぐる歩く。ぐるぐるぐるぐる歩く。海風の強い夜も弱い夜も。古い古い眼鏡をかけて。これは、母の遺品整理をしていたら出てきたものだ。といっても、元の持ち主は私。鯖江時代に使っていたものだ。横浜に移りコンタクトにしてから、使っていなかった。古くてもしっかりとしている。さすが眼鏡

の町、鯖江で作られたものだ。これと一緒に選んだ祖母のことを思い出すと自然と頬も持ち上がる。鯖江の友人たちの笑顔も浮かんだ。頬だけじゃなく、気分とかいろんなものをあげてくれるので、散歩のときにかけるようになった。

夜な夜なの散歩で、私は思い出とすれ違う。中学時代に懂れていた先輩とそっくりな少年に会えるのだ。最初に彼を見た時はぎよっとした。あまりにも似ていたからだ。いやいやと思い直す。中学時代はもう三十年も昔の話。記憶の中の先輩は私が捏造している可能性が高い。ハイジャンパーだった先輩もすりと背が高かったが、ここまでスタイルは良くなかった気がする。時代の流れに合わせてグレードアップしたのか？やはり、数年に一度取り出して眺めるような思い出は、自分の中で美化している可能性が高い。

すれ違い、すごいスピードで走っていく少年の背中を見ながら何度苦笑したかわからない。それは楽しい楽しい時間だった。気づけば不眠症も少しは改善していた。散歩の効果か、初恋少年効果か。どっちにしろありがたい話なのだった。

少年と会えない夜もあった。決まってコンタクトの夜だった。眼鏡ではないと会えない。眼鏡がなければ見えない？ 幻？ 更年期ではなくノイローゼなのだろうか。少し怖くなって、鯖江の魔法の眼鏡の為せる業なのかもしれないと思い直す。そんな素敵なことがあってもいいではないか。もう四十年以上も真面目に生きてきたのだから。親も見送ったのだから。少しは気晴らしもいい。こんなバカな妄想を話せる友達がいらないことは少し寂しいが、誇れる仕事も人より多少多い収入もある。もうそろそろ自分を許していいころだ。いろんなことを緩めよう。そんなふうに思っていた。思いながら歩いている。一人でも寂しくない。今夜も彼に会えたらいいな。そう思っていたら彼が現れた。すごい勢いでこっちへ走って来る。私もゆっくりだが進んでいるので、結果的にあつという間に距離が詰まる。

「あれ？」

いつもよりスローだなと思って目を凝らすと、少年の隣に大きな影があつた。少年より少し背は低いが、横幅は1.5倍はある。大人の男だ。大柄な体を揺らして走っている。なかなかのフォームだった。走り方は少年よりきれいかも

しれない。学生時代は陸上をしていたので、それぐらいはわかる。男は少年とよく似ていた。先輩とよく似ていた。

「須藤先輩？」

思わず声が出た。相手が足を止める。少年も合わせて、足を止めた。男がこっちを見た。

「あれ？ 島本くん？」「あ、はい。南中の陸上部で一緒だった島本です。お久しぶりです」「ああ、久しぶり」「お久しぶりです」「こんなところで」「ですよ。へへ」

それほど親しくもなかったのに、思わず話しかけてしまい、ばつが悪くなつて崩れた笑顔を浮かべた。夜なので相手にはよく見えないだろう。それだけが救いだ。

「これ、息子」「ああ、どうりで」「え？」「いや、あ、そっくりですね」「そう？」

先輩が笑い、少年は苦笑い。「中二なんだ。陸上じゃなくてバスケットをやつて」「こんばんはー」と少年が頭を下げる。なるほど、体育会系の発声だった。

「こんばんは」「じゃあ」「あ、失礼します」

それが思い出とのファーストコンタクトだった。

その後、何度か先輩と息子さんとすれ違い、ある夜先輩だけが現れた。

ん？　と思い、「息子さんは？　風邪でも？」「あ、いや。合宿です。部活の」

「ああ。そうですか。じゃあ」といつものようにすれ違おうとしたら、先輩に呼び止められてた。呼び止められて、三日後に飲みに行った。

関内の小奇麗な居酒屋で、先輩が東京の大学に進学し、東京で働き、中区のタワマン（私の住むタワマンと百メートルも離れていなかった）を買い、三年前に離婚したことを聞いた。離婚の原因は奥さんの浮気だったそうだ。

「働きながら家のことをして、子育てまでして、そんでもって浮気までするなんて。パワフルな方ですね」と言った後、なんと言っているかわからないとはいえ、馬鹿みたいなことを言ってしまったと自己嫌悪を感じ、黙り込む。先輩も黙っていたから気を悪くしたかと思っていたら、

「そうなんだよな。俺なんて、仕事して、息子のこと心配してたら、それでい

っぱいいっぱいだもんな。ちょっとレベルが合ってなかったのかもな。今は仕方なかったと思えるよ」

三年でそこまで。さすが先輩、器がでかいっす。さっき失敗したと思ったから、今度は口にできなかった。

「守との生活も慣れてきたし、あいつもそう言ってる。ほっとしてるよ。気を使ってるだけかもしれないけど」「そんなことないと思います。守くん、そんなストレス抱えてるようには・・・あ、そんな能天気とか、そんな感じではないですよ。頭よさそうだし」

「ふふ、どうかな」

先輩が笑う。息子が心底かわいいことがうかがえた。

「子供、いいですね、やっぱり。欲しかったかも」「そう？ 心配ばかりだよ」「心配したかったです。自分以外のことを。ここにきて、そんなふうに思えてきたんです。自分でも不思議です。人の気持ちって変わるんですね、やっぱり。母が亡くなって、家族がいなくなったってこともあると思いますけど」「そっか」

「ないものねだりです。わかってるんです。今の自分に後悔はないですから」
「それはいい」「ええ」「俺もだよ。そんなに大きな悔いはない。反省はあるけど。でも、まあ、いまのところでこれでいい」「いいですね」

「ああ、そんなに悪くない」

良かった、先輩は幸福だ。乾杯を求めてグラスを持ち上げると、先輩がグラスをあててくれる。こんな年で初恋をやり直しててするような夜もとてもいい。

やっぱり先輩が大好きだと思った。心は少女のように震えている。今夜はきつと熟睡。

「時代物を頼むわ」

大坂竹本座の座元から念を押され、近松は渋い顔をした。それに気づいた座元は近松の傍にすつと寄つて来て、諭すように続けた。

「あんたが世話物を書きたいのはようわかっとなる。そやけどな、心中物はもうあかんで。幕府に禁じられたのは、知つとるやろ」

近松が眉間に皺を寄せて黙ったまましていると、座元は呆れた表情を浮かべた後、「国性爺合戦みたいなのを、また書いて欲しいのや。あれ、大当たりやったやないか」

と言い置いて、芝居小屋を出て行つた。

残された近松は、誰も居ない客座敷に、どさつと座つた。小屋の中は薄暗く、前夜の客が残したむっとする臭気が滞留している。汗と唾と興奮と食べ物が混じり合つた、まさしく人間の臭いだ。近松のぎよろりとした両眼が和らいだ。

彼は、芝居を観に来てくれる客が大好きだ。彼らは芝居を観て、一日の憂さを晴らすのだ。

ふと、近松の両眼が泳いだ。いやむしろ、人生の憂いに気づいてしまうのか。己の求めるものを芝居の中に見つけ、現実の生活の味気なさに耐えがたくなってしまうのでは？だから、心中物は禁じられたのだろうか。

近松は深いため息をついた。時代物を書けだ？彼はゆっくりと首を横に振った。時代物も決して嫌いではないが、最近は無性に心中物が書きたい。

なぜだろうか。それはきつと、今も心の奥底に赤い火が燃えているからだろ。それは幾度も揺らいで糸のように細って消えかけ、存在すら忘れていた時もあつた。だが齢七十になつた今でも、その赤い火は心中の淀みに潜んだままにいる。

近松は顔を両手で覆つた。枯草のようにカサカサした皮膚に、どきりとした自分は老いたのだ。それはよくわかつている。しかしそうならば、この、心を掻きむしるような熱い感情は一体何なのだ。

女殺油地獄、心中宵庚申。書いても書いても赤い火は消えてくれない。書け

ば書くほど、赤い火は勢いを増してどす黒くなっていく。

苦しいのに、逃れたいのか捕まえたのかわからない。

近松は拳をつくり、薄い胸をトントンと強く叩いた。痛みが喉元に駆けあがってきて嗚咽となり、げほげほと咽た。あの時、どうすればよかったのか。近松は答えを求めるように、涙腺の緩んだ眼を空っぽの舞台に向けた。

次郎吉と呼ばれていた子供の頃、おかよに出会った。別に、劇的な出会いがあったわけではない。剣術の稽古からの帰り道、何度かすれ違ったただけだ。

おかよとすれ違う時、何とも言えない魅惑的な甘い香りがした。最初はわからなかったが、後に白粉の香だと知った。次郎吉の母は、白粉などつけない。十二歳という、大人の世界を覗きたくても覗けない不安定な時に、白粉の香を嗅いでしまったのだ。

おかよはいつも赤い着物を着ていた。年齢は自分より少し上だろうと、次郎吉は見当をつけた。ある日こっそり彼女の後をつけて、料理屋で働いていることを知った。店の人に、

「おかよ」と呼ばれていたので、名前がわかった。

次郎吉は、おかよと話をしたくてたまらなくなった。だが、すれ違う時、どうしても声をかけることができない。次郎吉は剣術稽古の帰りに料理屋の前で突っ立って、おかよが姿を見せないかと心を焦がすことしかできなかった。

望みは薄いと思っていたが、ある日おかよが店から出てきた。道を小走りで急いで行く。

次郎吉は後を追った。彼女は赤い着物の裾を気にしながら、七曲り通りを進んで行く。角を曲がり、そしてまた曲がり、ふと気づくと、次郎吉は一度も来たことのない界限にいた。彼は躊躇して足を止めた。赤い着物を見る間に小さくなっていく。そして、角を曲がって見えなくなってしまった。呆然とする次郎吉の目に、空の紫色がゆっくりと降りてきた。

次郎吉は、己の意気地のなさを責めた、おかよはおそらく、急用か何かで家に帰って行ったのだらう。あのまま追いかけていれば、彼女の家がわかったのに、七曲り通りの先へ行くことをためらったのだ。次郎吉は肩を落として、来た道に戻った。

暗澹たる気持ちで家に帰ると、すぐ父に呼ばれた。もしやおかよのことがばれたのか。どきどきしながら父の部屋に行き、神妙な顔をして正座した。父は次郎吉をじつと見ると、

「わしは、吉江藩を辞することにした」

と言った。次郎吉は、予想もしなかった父の言葉に驚いた。

「それで・・これからどうされるのですか」

「京へ行く。さるお公家に仕える」

父の決定に、意見することは許されない。

「わかりました」

そう言つて、次郎吉は頭を下げた。

ずっと吉江藩で生きていくと思つていたのに、まさか、京へ行くことになるとは。次郎吉の胸に痛みが走った。おかよに会えなくなつてしまうではないか。赤い着物を追わなかったことが、悔やまれた。せめて、自分が京へ行くことを伝えたい。そう思つた、

翌日、剣術道場に暇乞いをした後、次郎吉はおかよとすれ違った道を何度も歩いた。だが、彼女の姿はない。料理屋の前にも行ってみたが、おかよは現れない。

次の日もその次の日も、同じようにしておかよを探したが、会えない。次郎吉は焦ってきた。早くしなければ、京へ出立する日が来てしまう。気持ちを伝えられなくても、せめて別れぐらい言いたかった。

京へ立つ前日の夕方、こっそり家を出た。今宵こそは、おかよと会わねばならない。そうしなければ、一生悔いが残る気がしたのだ。

薄暮の中、先日おかよを追っていった道を、次郎吉は急いだ。七曲り通りを曲がって、また曲がって、以前引き返した場所に来た。

次郎吉は立ち止まった。秋が深まっているせいか、すんと陽が落ちて、辺りが急に暗くなった。彼は自分に言い聞かせた。この先を行けば、おかよの家があるはずだ。

足を進めようとした時、前方に、いきなりぼつと赤い火が上がった。火事か？まさか、おかよの家だろうか。どきりとして、次郎吉は火に向かって走り出し

た。

人の叫ぶ声が聞こえてきた。女の声だ。

「失火です、不審火ではなく、失火です・・」

炎の前で必死に叫んでいる。闇に立ち昇る赤い火が女の姿を照らし出した。おかよかった。

次郎吉に気づいたおかよは、煤で汚れた顔を向けて訴えた。

「どうか、失火だと証言してください。そうすれば、檀那寺に入るだけで済みます」

おかよは泣きだした。風に煽られて火は燃え盛っている。パチパチ音を立てながら飛んでくる火の粉が熱い。近在の人たちが集まって来て桶で水をかけているが、消える気配はない。強い煙の臭いに咽ながら次郎吉は尋ねた。

「中に人は？」

おかよは頭を振った。赤い火は狂ったように燃えている。失火でこんなに燃えるものだろうか。まるで油か酒に引火したかのようなうだ。

「本当に失火ですか」

次郎吉が問うと、おかよは急にぶるぶると震え始めた。そして、いきなりしゃがみこんで次郎吉に縋りついた。絡みつく指の一本一本の感覚が、袴を通して次郎吉の身体を鋭く突き抜けた。

「付け火だと、お縄になってしまいます。お願いです、一緒にお役人の所へ行つて失火だと言つてください・・・」

おかよは、涙に濡れた眼で次郎吉を見上げた。

「いつも、私を探していたでしょう？ねえ、そうでしょ？」

次郎吉の胸に、赤い火が飛び火してぼつと燃え上がった。彼女の力になろう、そう思った時、大きなだみ声が響き渡った。

「おかよー、おかよはどこだー」

背の高いやせ形の男がふらふらしながら近づいて来る。酒臭い。彼は、おかよの傍に居る次郎吉にじろりと目をやると、

「なんだ、てめえ」

と言うなり殴りかかってきた。次郎吉はさつと身をかわした。男はなおも襲い掛かろうとしたが、おかよがしがみついて止めた。

「あんた、やめて」

二人の様子を目にして次郎吉は後ずさりした。あんた・・だと？男はおかよを突き飛ばした。

「おかよ、おめえ、男がいたのか」

次郎吉は呆然と赤い火を見つめた。おかよはこの男のために、必死で頼んでいたのか。

次郎吉は駆け出した。無我夢中で逃げた。おかよから、赤い火から。暗い七曲り通りを、曲がって、曲がって、一度も振り返らなかった。

あの夜見た赤い火の生々しさは、今も近松の心にじつとりと粘り付いている。舞台に向けられていた近松の両眼が光った。そうだ。心中物は禁止されたが、いつかまた解禁されるかもしれない。その日のために、新作を書いておこう。

胸中に、あらずじがどつと流れ出て来た。

主人公の侍は、恋い慕うおかよの亭主に付け火の罪を着せお縄にさせる。おかよは侍を責めるが、やがて二人は恋仲になる。だが、侍が付け火をしたことが

露見し、切羽詰まった二人は心中する。題は、「七曲り心中」。
皺の寄った口元から、ふふっと笑いが漏れた。赤い火を、消す必要などないの
だ。

見聞録

近松の里

たちまち

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。

近松門左衛門が生まれ育ったまち「さばえ」



江戸時代を代表する文豪

近松門左衛門

ちかまつ もんざえもん



近松門左衛門像（複製）
（財）特選文庫蔵

近松はやはり鯖江で生まれていた！
『近松鯖江誕生説』とは

大阪市立大学の森修先生が、杉森家の系譜・親類書と福井藩の歴史書の記述を検討して、近松門左衛門は福井で生まれ、殿さまの松平昌親が福井から吉江にやって来た後に吉江に移ってきたと発表してから60年、その説が定説とされてきました。

でも、正保2年（1645）に父忠昌が死去し、同年、幕府は2人の側室腹の男子（昌勝・昌親）に松岡・吉江への分家認めました。そして、その翌年、昌親は、母・妹とともに江戸に赴き、吉江に入るまで江戸暮らしでした。その間、その家たちが、殿さまの留守を預かって、吉江の地で藩政をとり仕切っていたのです。

平成30年（2018）三好修一郎福井大学名誉教授が、歌舞伎学会の雑誌において、その事実を明らかにしました。

ところで、昌親の叔母が嫁いだ西光寺には、昌親からの手紙が数多く残されています。昌親が「従五位兵部大輔」の位階を授かった時、西光寺から家老の高屋善右衛門宅にお祝いに駆けつけました。昌親からの御札の手紙の中に、その名前があります。それは、**近松が生まれる1年前です**。その頃には、家臣たち（と、その家臣）は、吉江にいたという何よりの証拠です。つまり、近松は、吉江で生まれたと考ええる方が理にかなっているということです。



三好修一郎
福井大学名誉教授



昌親からの御札の手紙（高屋善右衛門の名前があります）



近松門左衛門が生まれ
多感な幼少期を過ごした近松の里
近松作品の原点になったまち



吉江藩主・松平昌親
瑞蓮寺蔵

近松の父は吉江藩士

立待地区は、江戸時代、吉江藩の城下町でした。吉江藩は、1645年に福井藩第3代藩主、松平忠昌の逝去後、3男昌親が2万5千石を分知され、立藩しました。この時に、近松の父は昌親公の家臣として福井藩から吉江藩に移りました。しかし、1674年に福井藩第5代藩主、松平光通が逝去すると、嗣子がいなかったため、昌親が本藩である福井藩を継ぎました。そのため、吉江藩は三十年足らずで廃藩となりました。

たちまち（立待）の名称の由来

泰澄大師の母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社「経智神社（きんちじんしゃ）」泰澄大師が越知山に修行に行っていた陣りを母親が立って待っていたという伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門（1653-1724）『義理人情に悩む日本人らしい家を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。『東洋のシェイクスピア』と呼ばれるほどに、人間の悲しさや愚かさ、やさしさを描いたその作品は370年を経た現在も愛され続けています。









近松の里

たちまち

Tachimachi

見聞録

立待をまわって 歴史を学ぼう!



立待公民館前にある近松門左衛門記念碑庭園のサツキは、浄瑠璃に欠くことのない三味線の形をし、初夏には美しく彩られます。奥に近松の辞世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が鯖江を離れるまでの解説が記されています。手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。

近松門左衛門
記念碑庭園

ちまちまのめぐりしあふくた

map
Number
1

杉本町



立待公民館内にあります。徳川家康公のひ孫にあたる吉江藩主・松平昌親公や近松と鯖江の関わりについて紹介しています。文案関係の展示をはじめ、鯖江市在住の創作紙粘土人形作家がとうかお氏によるジラマ風人形の展示もあり、子どもから大人までが楽しみながら、近松の幼少時代を振り返ることができます。

近松の里めぐり
情報館

ちまちまのめぐりしあふくた

map
Number
1

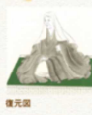
杉本町

立待の指定文化財をめぐる



専慶寺本堂左脇に位置する2本の杉のうち南側の目通り400cmを超える大木。真っ直ぐに伸び枝張りも大きく、今なお樹勢は盛んである。樹齢から推定すると、近松もこの大杉を見ていたのかも?

⑤ 春慶寺の大杉
しんけいじのおおすぎ
●所在地 米田町



復元図

如祐は本願寺7世存如の長女で、蓮如の妹。西光寺は宝徳3年(1451)、存如が丹生郡石田村に建立した一字に始まり、如祐に荒川興行寺の永存を迎えて初代とした。晩年を福川(旧朝日町)で過ごしたことから福川尼公とも呼ばれる。



⑥ 絹本着色如祐尼像
けんぼんしきにょくすうにぞう
●所在地 杉本町 西光寺 ●時代 16世紀

立待地区には、貴重な多くの文化財があり、いつまでも通観見ることのできるものもあります。一度訪ねてみてください。

⑦ 福井県指定文化財

map
Number
2
西光寺
吉田町

西光寺表門

全国でも珍しく殿号で呼ばれる西光寺は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐことになったことで、廃藩となった吉江藩館の表門が西光寺に移築されたと伝えられています。当時の吉江藩の面影を残す希少なものと考えるでしょう。国の有形登録文化財に登録されています。



map
Number
3
石田の渡し跡
吉田町 柳井町

石田の渡し場跡

江戸時代から明治頃まで日野川では、舟を利用し、河川交通が盛んで、米やさまざまな物資が三国湊まで運ばれました。古い文獻によると、この石田にも舟渡し場があったことが記されています。近松作品に影響を与えたと言われている「幸若舞」は、日野川の向こう越前町朝日地区が発祥の地です。近松は、「幸若舞」を見るために石田の渡しを利用したのでしょうか。



map
Number
4
吉江七曲り通り
吉田町

吉江七曲り通り

七曲り通りは、吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、何度も屈曲させて大回りさせてという城下町特有の道路構造をしています。変わらぬ地割りや道路幅から吉江藩当時の様子を伺い知ることができます。年を通して趣きがありますが、春には桜の花で彩られ美しい風情を醸し出します。



③ 春慶寺の石造物
しんげいのせきぶつ
●所在地 米田町 ●時代 室町時代・正徳



室町時代から近代にかけて造立された墓石群である。いずれも惣谷石製で、一石五輪塔7基・板碑2基・石仏65基・墓石41基・無縁塔1基・摩崖1基におよぶ。石造物がこれほど多く遺存しているのは、市内でも稀である。

⑪ 西番の名号石
にしばんのなごういし
●所在地 三條出野町 ●時代 天保15年(1844)



自然露出の凝灰岩に彫刻されている。道路に面した垂直面中央に舟形光背を彫り込み、中軸線下方に「南无阿彌陀仏」の六字名号を彫刻する。光背の右側若面には目的・作成年・願主が刻まれる。良好な保存状態を保っている。

⑫ 西番の磨崖仏1・2号
にしばんのまがひぶつ
●所在地 三條出野町 ●時代 1号 天文15年(1546) 2号 江戸時代前期



市内で確認されている唯一の磨崖仏である。1号は阿彌陀三尊像が彫刻されているが、現在は、顔が不鮮明である。2号も元来は阿彌陀三尊像であったが、両脇侍が欠落している。また、中尊左側にも阿彌陀如来像が彫られている。



福正寺

ふしんじ

創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが、長享2年(148)に浄土真宗に改宗、戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定めまし。この時、昌親公より多くの材木を寄進されています。本堂正面軒下には、悪夢を食べてくれるといわれている霊獣「災」が彫刻されています。



西番天満神社

にしばんてんまんじ

ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により、御神像は消失し、作り直されました。西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもありました。天満宮の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



吉江藩館跡

よしえはんかんと

吉江藩が成立した正保2年(1645)以降、藩主松平昌親公は、陣屋や町並みの整備に着手。従来の町に新しく整備した町を合わせて「十一口」「これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親公は、入部後、政治家としての手腕をふるい、新しい農地を開拓したり、商工業に力を注ぎます。吉江は丹生郡の政治経済の中心地として隆盛を極めました。



立待の指定文化財をめぐる



木造阿弥陀如来立像

●所在地 杉本町西光寺

●時代 平安時代後期

穏やかな表情の丸顔・薄い体衣・平板な肉付け・浅い衣文線などの特徴から、12世紀前半頃に当地で制作されたと推定される。平安時代後期の典型的な来迎印阿弥陀如来像として貴重である。



縦89.5cm、横113.5cm

近松門左衛門作の「国性爺合戦」で、和藤内が千里ケ竹で虎を追治する場面を描いている。和藤内とは、和(日本)でも藤(唐・中国)でも内(ない)という洒落で、奉納者は現在の吉江町一帯の4名である。

和藤内図 絵馬

●所在地 三浦村出待町西番天満神社

●時代 明治末(1894頃)



縦42.4cm、横75.8cm

黒駒のたくましい体つきが特徴的な絵馬。繋かれた鎖を切らなばかりの黒駒の前脚付近の盛り上がった筋肉と、柔かく結わえあげられた鬣が対照的で、神馬の威厳を十分に醸している。

繫馬図 絵馬

●所在地 三浦村出待町西番天満神社

●時代 貞享元年(1684)



近松門左衛門坐像

ちかまつもろさむらう

map
Number
8

近松町

承応2年(1653)、絳江で生まれ、多感な幼少時代を過ごし、近松、近松作品の原点になったまち絳江。その土壌は、絳江の豊かな自然と人情風情に育まれたと考えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい通所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像が、つしりと鎮座しています。近松会館の敷地内にあります。



大谷公園『あなる園』

おたにこうえん

map
Number
9

近松町

グミ、栗、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通して「育て、収穫し、食する」という体験学習型公園を目指しています。樹木の中には、観望聖人の「三度縁起」という伝説に由来する3本の栗の木もあります。自然に囲まれていて、高台にあるため見晴らしがよく、特に夕日の眺めは美しいです。遊具や駐車場も整備されています。



春慶寺

しゅんけいじ

map
Number
10

近松町

寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあつた草庵に名付けた、心敬寺にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に「千坊がり」をめぐっていましたが、織田信長の越前侵攻の機を討ちに遭い、現在の寺院だけが残りました。吉江藩主松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を「春日山春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。

●所在地 紀野町 ●時代 近世以前

京都の北野天満宮北側の「札の森」と、札の地勢が似ていることからこの地を「札」と呼ぶようになった。ここに祀られているのは、右手に剣、左手に筒を持つ笏谷石製の白不動明王である。

◎ 紀野お清水

戦国時代の百姓と大名朝倉氏の重臣魚住氏との関係を物語り、本市の北部に位置する立町郷の開発や耕地の状況がうかがう貴重な資料である。朝倉氏の発給文書の中で、具体的に百姓の様子が知られるものは珍しい。

立町郷内田倉重臣の行状 文政3年(1820)

魚住重臣書状 天文2年(1532)

画像希望 4点



榎お清水
ここは、千古の昔より湧き出しており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様に手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。吉江藩主・松平昌親公は、筋谷石で、水飲み場と洗濯場に分けて整備し、城下町に水を引き入れるために木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のパチの形をしています。ふくいのおいしい水に認定されているとともに、市の文化財にも指定されています。



存如上人御廟所
西光寺を創建された存如上人の御廟所は、俗に「お塚所」と呼ばれています。存如上人は、真宗中興の祖とされる蓮如上人の父君です。上人の御廟所は西光寺の南東一キロメートル先の札地区にあり、西光寺興地境内地として当時の面影を残し、お同行の尊厳を崇めています。昭和24年、存如上人五百回忌法要の際には、本山より光明親下のご親拝をいただきました。



諏訪神社
祭神は諏訪大明神・建御名方・富命・入坂富命で明治14年1月1日、信濃国(長野県)諏訪大社・下社より御分霊を勧請して祀り、更に大物主之神を合祀しました。境内にある末社稲荷社は、保食神を祀っています。神社境内の総面積は711坪です。春祭り・夏祭り・秋祭りの祭日を27日に定めているのは、諏訪大社・下社の御祭礼に合わせで行っているからです。



立持の指定文化財をめぐる



画像希望2点

木綿の織物で、その起源は、文政年間(1818~1829)、丹生郡立持村下石田の高島善左衛門が自ら工場を建設し、美濃から職工を招いて製織したのが始まりとされる。女学校や小学校の制服として採用され「学校綿」と呼ばれた。

85 石田綿(無形文化財)

所在地:立持地区 ●時代:江戸時代後期~現在



浄土真宗本願寺7世存如が、門徒に下げ渡したものである。このような尊像は蓮如期以降に急増するが、存如が下付したものは全国的にも少なく、越前に伝わる遺品としては最古のものである。



91 絹本着色方便法師身尊形像

所在地:石田町 ●時代:室町時代



浄土真宗に縁有るの来迎印阿彌陀如来立像であり、構造も鎌倉時代以来の寄せ方を踏襲している。本像の台座は、江戸時代に後補されたと考えられるが、真宗系仏像のものと比べて非常に段数が多く、本寺の寺格の高さを如実に示す例として貴重である。

5 木造阿彌陀如来立像

所在地:石田町 ●時代:室町時代

石田神社

祭神大日靈貴尊は、天照大神と同神です。神武天皇の頃、ここに石田彦という豪族がいました。神武天皇御東征の時、この地の悪者どもを平らげて、天皇に忠誠を尽くしましたので、その功績を褒められ玉串を授け、石田郷を賜りました。石田彦は拝殿を築き、神武天皇を神としてあがめ奉りました。これが石田神社の起こりです。



岡井慎吾記碑

小学校的教員から博士にまでなった教育者で、『福島の研究』で、大きな功績を残した日本を代表する漢学者です。最初は、福井県の小学校の先生であったこともあり、母校でもある立待小学校の校歌や勤務した朝日小学校等の校歌を作詞しています。立待小学校の校歌には、学びを大切にし、山に登るように勉強して優れた人間にならうという願いが込められています。



石田織元祖 高島善左衛門翁碑

江戸時代の日野川は大雨が降ると氾濫し川になり、洪水になるたびに川筋が変わりました。石田という地名は、日野川が氾濫するたびに田畑が石の野原になることからついたといわれています。善左衛門は、農業以外にお金を得ることができないだろうかと考え、石田で始めた織物が石田織です。石田織は『学校給』ともよばれ、県内の小学校や女子学校の制服として使用されました。



「くつはきの阿弥陀如来」様に
つないでいただいた大切なご縁
—— 歌舞伎俳優 中村也南さん（近松三郎） ——

近松門左衛門が上方歌舞伎創設者の一人初代近松十郎のために書いた歌舞伎作付けいせいの原。この作品は、三国福井県坂井市の遊郭が主な舞台で、現存する月窓寺集落のくつはきの阿弥陀如来が主役です。
くつはきの阿弥陀如来は、花井時代、京都での出陣後から行方不明になっていました。三好修一郎福井大学名誉教授による近松くつはきの遊郭が月窓寺で開演された際に、ご往來からくつはきの阿弥陀如来が300年の時を経てくつはきの結縁をお聞きし、所有する金毘陀を訪問したことが、中村也南さんをお迎えしてのくつはきの阿弥陀如来重現。近松300周年法要「近松没後300年記念」近松の里のお餅りの開催につながりました。



写真上：近松300周年法要2023.11.22 近松寺境内
写真上：くつはきの阿弥陀如来重現（近松寺境内）
写真下：くつはきの阿弥陀如来重現した近松の里の秋の夜（近松寺境内）

「近松の里たちまち」は、これからもこのご縁を大切に
近松のまちづくりを進めていきます。

近松門左衛門が生まれ育ったまち「さばえ」って どこにあるの？

福井県のほぼ中央に、人口約7万人のまち鯖江市があります。
眼鏡フレームの国内生産シェア9割以上を誇る眼鏡産地の中心地であり、
そのほか繊維王国福井の中核を担ってきた繊維産業、
1,500年余りの歴史を有し国内の業務用漆器の8割を占める漆器産業、
そしてIT産業などが集積した「ものづくりのまち」です。



近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F
「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20
☎0778-53-2257

立待公民館
「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2
☎0778-51-3376

<https://www.city.sabae.fukui.jp> (鯖江市ホームページ)



お問い合わせ

立待公民館

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2
☎0778-51-3376



■さばえ近松文学賞 し恋話 (KOIBANA) 2025し ■主催者

令和5年10月12日 発行

近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005

福井県鯖江市杉本町702-2 (立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版編集】

発行社 [DoCompany出版 \(ポポブックス\) BoboBooks](#)

東京都港区南青山2-2-15 ウィン青山14階

TEL 050-3692-4434

福井県福井市灯明寺1丁目1301

TEL 0776-28-5233

<https://bobobooks.com>